



雨上がりの青空（今 つらい あなたへ）

私はこれまで、教育の現場で多くの子供たちと接してきました。その中で、様々な困難に直面している子供や保護者を目の当たりにすることもありました。管理職として、苦悩する職員と向き合うこともありましたし、私自身も、何度かつらい時期を過ごしたことがありました。つらく苦しい人が身近にいるとき、人はどのように接したらいいのか、私自身は、どのように接してほしかったのか、或いは、どのように支え、助けてもらったのか、そんなことを思いながら、自分には何ができるのか、常に考えています。

以前、校長室だより第30号「出会い」（2021年12月3日発行）の中で「・・・子供たちがそれぞれに生きていく中で直面している困難に対して、多くの場合、学校は無力・・・」と述べました。学校という組織だけでなく、私個人も、苦しんでいる人を助けたいと思っても、無力感に苛まれることの連続です。

「明けない夜はない」「止まない雨はない」「春は必ず来る」等々・・・、励まそうとする美しい言葉は世の中に溢れています。それらは、どうしようもない困難に直面した人々に対して、無力感に苛まれながらも、本当に思いやりを持った人々の優しさから生まれた言葉なのだと思いますし、それらの言葉によって支えられ、救われた人々もいたことでしょう。しかし、今つらく苦しい人にとっては、「いつ明けるか分からない夜」「もう止まないかも知れない雨」「春が来るとは到底思えない冬」なのだと思います。そんな本当につらい人がいるとき、もしも自分が傍らにいたら何ができるだろうかと、考えれば考えるほど、自分の無力さを思い知らされます。

それでも、何もできなくても、人に対する優しさだけは失いたくない、失ってほしくない。いつもそう思っています。

「大丈夫」という言葉があります。この言葉は近年、学校を含めた多くの職場において、危機管理上望ましくないと言われている言葉です。確かに、事故や不祥事を防止する観点からは、「実態把握や点検等を怠っていながら『大丈夫』と安易に考えるような危機意識の低さには問題がある」という戒めはもっともなことです。しかし私は、この言葉は本来、このような無責任で怠慢な意味合いで使う言葉ではないと思っています。「大丈夫」という言葉は、相手に対する思いやりや優しさを込めて使う言葉です。

つらいときには、その事実には、自作自演の悲劇の筋書きを書き加え、自分で自分をさらに苦しめてしまうことがあります。そんな人がいたら、何もしてあげられなくても、私は「大丈夫」と言いながら寄り添います。それは、現状は変えられなくても、その人が、それ以上自分で不安を膨らませたり付け足したりしてしまうことのないように支えるためです。困難や苦しみは、最終的には自分自身で克服するしかないのですが、人の優しさは、落ち込んでいる人にわずかではあっても安心感を与え、絶望や諦めに心が塗りつぶされてしまうのをくい止めるための力になるものです。

未知の明日を、いつも希望から始めることができるように。そんな気持ちで、大切な郡山小学校の子供たちにも、日々接したいと思っています。

雨上がりの青空の下では、景色は雨に洗われて輝き、光はなおさら眩しく感じられることでしょう。

..... 切り取り線

学校への御意見・御要望・校長に知らせたいこと など

2022年2月25日（ ）年（ ）組 児童氏名